

[書評]

宮島喬『文化と不平等 社会学的アプローチ』有斐閣 2006年(第3刷)

中崎 温子

Atsuko Nakazaki

多文化共生社会への扉を開くときに、社会的経済的公平さの問題は無論のこと、教育における公平さの問題、多言語時代の言語権の問題等々に分け入って論じることは不可欠である。しかし、文化の問題となると、あまりに多面的で錯綜し可視化できない部分を多く孕み、論議の対象となるも、それ自体イシューとしては争点化されにくい面がある。本書がすぐれて明快なのは、見えにくい現実を敢えて一般化することなく、マイノリティと呼ばれる比較的可視的な周辺者に観察の焦点を絞り、実態例証や実践例を理論から裁断し、かつ、多面的に考察している点にある。

本書の「序論 文化における現代-社会学的アプローチ」の「日本に定住しようとしている数万人の子どもたちが、相当に高い勉学のモチベーションを示しながら、日本語と日本的学校文化のカベにぶつかり、中等教育に参入することもむずかしい状況に置かれているという問題がある。マイノリティにとって乗り越えがたいこうした日本的な文化障壁をどう突き崩していくか、それは著者には大きな問題、課題であると感じられている」という記述は、まさに、拙論「多文化共生社会における文化普遍主義探究のための一考察-「同化」構造の要因を超克する視座から-」(2012)と問題意識を一にするものであるが^{注1)}、拙論の限界をもまた、教えてくれている。

以下、章立てを紹介する。著作自体の初刷は1999年であり、それほど新しいものではないが、増刷を繰り返している。

- 第1章 文化と不平等-問題と展開-
- 第2章 芸術の享受と社会的不平等
- 第3章 社会変動と教育拡大-その社会的含意-

第4章 同質化, 差異, 不平等-メリトクラシー論の虚と実-

[付論] 文化, 教育への社会学的研究の課題に寄せて

第5章 家族, ハビトゥス^{注2)}, 実践-資本としての家族をめぐる覚書-

第6章 日本におけるマイノリティの文化的諸条件-外国人の子どもの教育における言語と文化資本^{注3)}-

第7章 移動・移民と文化変容-適応の動態と再生産-

第8章 移民労働者二世世代における剥奪と戦略-言語, 教育, 統合をめぐる言説と実態-

第9章 文化の共存と文化の序列化-ヨーロッパにおける少数文化の位置と可能性

第10章 社会学理論における「近代」と文化

[展望] 問われていること

ここでは、主に、言語と教育に関わっての記述に限定して着目しておきたい。

第1章では、社会言語学者トラッドギル^{注4)}の言及を引き合いに出し、例えば、母音の後の /r/ の発音がよいか悪いかの根拠は言語そのものに無いこと、だが、いったん「正しい発音」の意味付与が与えられたら、その発音をする者を優位とする社会的差異化が行われること、即ち、文化的再生産が正当性を帯びて意味付けされることを見極めなければならないとする。

第3章では、日本の親子世代間の職業移動表などのデータから、メリトクラシー(業績主義, 能力主義)の中での教育の位置づけについて語り、ニューカマー-外国人の子どもの教育マイノリティ層の問題に言及している。

第4章では「日本型メリトクラシー」における高等教育の序列制の含意から、高等教育機能の文化的資本的な差異の存在が認識されつつも、「努力をすれば挽回可能」という努力主義のタテマエの支配が社会学的な文化的再生産論を受け入れない風土を形成しているとする。

第5章と第6章では、日本社会にコミットしようとするニューカマー親子の「資本としての家族」観ゆえの家族の解体、また、移住者の子どもの重層性をもった学修困難に誘引されるアイデンティティの曖昧化、アンビバレントな感情の問題が提示されている。

第7章では、文化的再生産に対する言及の中で、いわゆるニューカマーの変動制・移動性の視点が、文化的ヘゲモニー、文化的ヒエラルキーの多元性を解釈する上で、社会状況と不可分であることが述べられている。

「展望」の項では、本章で展開されてきた種々の問題点や課題を踏まえて、改めて「能力」と称されるものの社会的規定性、それゆえ、正統視されている文化の普遍性ももう一度問題視されなければならないとする。前掲の拙論でも、この点が、学校文化の組み換え作業の中で大前提とすべき考察因子の一つであることの認識に及んでいなかった。

社会学的アプローチから今後に学ぶことも多く、その思いも込めて、本書を推奨したい。

会的多様性」「ハビトウスの変換」「行動性向としてのハビトウス」「第一次的なハビトウス」「適応のハビトウス」「“伝統的”ハビトウス」「学びのハビトウス」等、「測り難い作用をもつ」かなり複雑で重要なキー・概念として用いられている。

注3) 著者は、第1章 p.26で「文化資源」とせずに「文化資本」という用語を用いることの説明をしている。質的にはユニークで置き換え不可能で非連続であるはずの諸個人の活動や行為を、(本書の記述全体に見られるように)等質の尺度によって測り、上下、大小に序列化するという操作が現実にもみられ、文化も資本化されて機能せしめられているかぎり、「文化資本」という言葉がリアリティと、隠された現実を抉り出す力をとにもちうる、と説く。

注4) P.トラッドギル(土田滋訳)『言語と社会』pp.11-13 岩波新書

受稿：2013年5月20日

受理：2013年6月13日

注1)『地域政策学ジャーナル』愛知大学地域政策学部紀要 第1巻第1号 pp.33-50

多文化共生社会作りにおける「阻害要因」として、日本の言語施策としての「方言札」「アイヌ学校」「国民教育としての国語」、言語自体が孕む「日本語の同化構造①：ハイコンテキスト、省略、異質馴化」「日本語の同化構造②：授受表現のウチ意識と主観性、人称詞と授受表現」の文化性等々を取り上げている。

注2)「ハビトウス」は、社会学者ピエール・ブルデューの用語で「ほとんど無意識化された行動性向」ということであるが、社会学的には、例えば本著でも、「ハビトウスのな行為レベル」「ハビトウスと場との即時の調整」「ハビトウスの作用」「ハビトウスの社